

## 近所づきあいが避難生活をささえてくれました（その4）

宮城県・看護師さんの話（その4）

【避難所はどのように運営されていたか】

学校の先生方・PTA・地域の人で構成された避難所本部は、各教室と体育館のエリアごとに班（数十名）に分け、班長を決めました。

すべての物資は班長と4～5名のサポーターが配布を行います。班の中には歩けないお年寄りもいましたが、そうした人たちにも物資が行きわたるように、班長が手配をしていました。

班制度ができたおかげで、支援食料の菓子パン（1班40人あたり80～90個）もうまく分けられました。

また、自分から避難所本部の仕事を手伝う人も出てきました。例えばガス屋さん、被害を受けなかったガスボンベとガスコンロを避難所に運んできてくれ、そのガスコンロのおかげであたたかいものが食べられるようになりました。

燃料となるがれきを集める人も出てきました。おかげでお風呂というわけにはいきませんが、お湯をわかすことができました。

体力のある人は避難所の周囲のがれきをかたづけ始め、少しずつ道も作られていきました。そのおかげで物資をつんだ車がきやすくなりました。

トイレそうじは大変ですが、最も大切な仕事の一つです。それをそっせんしてやってくれた人もいました。

PTAの会長は、昔は“ガキ大将”だった人です。そのリーダーシップが避難所のとりまとめに活かされたと感じます。でもみんなの避難所生活をうまく進めていくために一番大切なのは、「命令」ではなく「自発的な行動」です。

落ちこんで、不安がいっぱいの避難所では、そこにいる人は命令では動きません。だれかが何かを始めると、それを見ていた人がまた何かを始める。よく「あの人は何もしない」と文句を言いがちですが、人に何を求めるかではなく、まず自分が何かを始めることが重要だということがよく分かりました。

7日目に大きな余震が来てパニック状態になりかけましたが、支援ボランティアといっしょに、みんなで在宅避難者に声をかけ、30分で避難を終えることができました。

取材地：宮城県石巻市  
協力：キャンパス石巻のみなさん  
取材：「小さな親切」運動本部